

自閉スペクトラム症における性の問題 ー 保護者の悩みと支援についての考察 ー

河本昌也・立松英子

東京福祉大学大学院 社会福祉学研究科 (伊勢崎キャンパス)

〒372-0831 群馬県伊勢崎市山王町2020-1

(2019年1月7日受付、2019年3月18日受理)

抄録：自閉スペクトラム症(ASD)における性の問題は、障害特性である社会性の障害を反映し、困難性が高い。本研究では、①保護者における性の悩みの実態を解明し、②教育・福祉における支援の方向性を見出すことを目的とした。(1)質問紙調査を保護者に行った。対象は彼らの子ども69名(男64名、女5名、平均年齢22歳1ヶ月)であった。(2)面接調査を3名の保護者と5名の特別支援学校高等部教諭に行った。その結果、(1)量的調査で回答が得られた対象は男性の割合が顕著に高く(94%)、年齢は幅広く(7歳から40歳7ヶ月)、悩みの内容に統計的な差を見出すことは困難だったが、IDの合併(68%)により悩みの時期が長引くことが示された。(2)学校教育への期待が高く、相談や研修機会の提供が求められていた。ASDにおける性の問題は個性が高く、学校等の社会的支援を介し、個々の生活の質向上の文脈で考える必要があることが示唆された。(別刷請求先：河本昌也)

キーワード：性、自閉スペクトラム症(ASD)、障害特性、保護者、社会的資源

緒言

自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorders: ASD) は、脳の機能の発達の障害の一つである。アメリカ精神医学会が作成した「精神疾患の診断・統計マニュアル」第5版 (APA, 2013) によれば、「A：社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥」と「B：行動、興味、または活動の限局された反復的な様式 (Repetitive/ Restrictive Behavior: RRB)」が比較的低年齢において発現する、精神と行動の障害と定義されている。

「スペクトラム (連続体)」とされる理由は、定型発達との境目が曖昧だからであり、また、行動で診断する障害であって、診断基準ではIQの水準も生物学的指標も特定されていないため、知的障害など他の障害との合併も多く (神尾, 2010; 近藤ら, 2015)、顕著な特性を持ちながらその程度や年齢によって多様な実態を有し (Wing & Attwood, 1987; Rutter, 2011)、その治療や教育には個性の高い対応が求められる。RRBなどのASD様の症状は、重い知的障害においてもしばしば認められるため、放課後等デイサービスなどの障害者支援の場には、特徴的な症状があっても診断されていない事例も多く通っている。

本研究は、障害のある子どもの放課後等支援に携わる筆頭著者が、保護者の抱く切実な悩みに直面したことを動機として行ったものである。保護者からしばしば告白される

子どもの性の問題は、秘匿性が高いがゆえに深刻であり、思春期には抱えきれない問題となって、解決に長い時間を要することもある。なかでも、ASD本来の障害特性である他者の視線に應えることの困難性は、羞恥心の欠如や社会的状況の把握の難しさ、衝動性と結びつきやすく、思春期には家庭内での養育が困難になるほど症状が重症化するケースもみられる。「性」は本来否定されるものではないのだが、社会的な視点と深い関係があるため、その教育的対応は、障害の治療と同様、困難性の高い課題となっている。

困難性の要因には、ASDの症状の多様性や複雑性も関与する。例えば、しばしば伴う常同運動や運動性チック、感覚過敏などが性の問題と捉えられてしまうことがある。むやみに人にタッチする、気になる身体部分に触る、服の感触を嫌がって人前で脱いでしまうなどは、本人にとっては性的な関心に基づく行動ではないのだが、他者の視線からは性的行動に見えてしまう。田実 (1999) は、ASDの障害特性による行動と性衝動による行動との区別がつきにくいことを指摘している。また一方で、服部 (1989) は、対人関係構築の困難さから性衝動の対象が異性ではない事例、衝動自体を表現できない事例もあるとしている。

知的障害のない事例では、思春期に異性との良好な関係を構築・維持することがかなわないことが、鬱やひきこもりなど、重い精神症状につながる可能性もある。Haracopos と Pedersen (1992) が指摘しているように、ASD児の性に

関する最大の問題は、「他者との社会的関係を確立し、維持し、理解することの困難さ」という本来の障害特性が背景にあるということである。

ASDは現在までに発生のメカニズムは解明されておらず、遺伝的要素が関与していると推察されている(神尾, 2010)ものの、本質的な解明には至っていない。そのため性行動への対応においても、その本態である「社会性の障害」の解決から出発することは難しく、「より他者に受け入れられる行動を育てていく」という方法が考えられてきた(Newton, 2006)。

一般的にも、「性」はデリケートな話題の一つである。本来子どもの成長は喜ばしいことであるが、障害の有無に関わらず、思春期における心や体の変化を受け入れることに戸惑う保護者は多い。このため、ASDの性についての課題も表面化しにくく、また情報公開・情報共有が進めにくい分野である。例えば、男女交際のこと、心と体の急激な変化に関すること、氾濫する性情報の制限の方法、直面している性の問題行動のことなど、その内容は多岐に渡り、専門的な相談窓口の存在が少ないことも、保護者の負担を大きくしていると推測できる。また、研究者の見解においても、性情報の開示の範囲、タイミングや手順について意見はまとまっていない。個々の理解度や成長に合わせて行なうことが望ましいとする意見(大井, 1983; 蓮合ら, 2016)がある一方で、事前に教えておくことで誤認やパニックを避けられるとする意見(国分, 2016)もある。さらに親や指導者の願いを明らかにすることが肝要との意見もある(大井, 1983)。

このように「性」は重要な課題でありながら、保護者の性に対する羞恥によって情報共有が進みにくく(梶, 1987)、研究も少ないうえ、個別的あるいは文化的に依存した価値観も反映する(Haracopos & Pedersen, 1992)。前述のように、ASDの複雑な障害特性と個別性の高さが直結し、解決策自体が見出しにくい。よって、量的研究と質的研究の両方を通じて事実を直視し分析する必要があると考えた。

以上を踏まえて、本研究においては目的を二つ設定した。①保護者における性の悩みの実態解明と②支援の方向性を見出すことである。

研究方法

研究対象

研究1(量的調査)では、XとYの各県の自閉症協会に依頼し、180名の会員(ASD児の保護者)に調査用紙を配布した。回収されたのはそのうち69例(約38%)であった。調査対象の全員がASDを伴うのは明らかだが、個人情報保護の観点から配布先は自閉症協会に一任したため、回収

されなかった事例の年齢、性別等は不明である。

回収されたアンケートの記入者の性別内訳は、父からの回答が4例(約6%)、母からの回答が65例(約94%)であった。年齢別内訳は、40歳代21名、50歳代35名、60歳代以上13名であった。(表1)

量的調査の対象となったASDを伴う子どもの全体の年齢幅は7歳から40歳8か月、性別は、男64名(平均年齢21歳11か月、SD8歳)、女5名(平均年齢24歳、SD9歳)、女性の割合が顕著に少なく(約6%)、男女の年齢に有意差はなかった。(表2)

知的障害(Intellectual Disability: ID)を伴う事例は47名(68%)(男45名、女2名:平均年齢22歳5か月、SD7歳2か月)、伴わない事例は22名(32%)(男19名、女3名:平均年齢21歳6か月、SD9歳1か月)、それぞれ年齢幅は7歳から40歳(ID有群)、8歳から40歳8か月(ID無群)で、IDの有無で年齢に有意差はなかった。(表3)

学齢期の対象は25名(36%)、すでに卒業した事例が44名(64%)であった。学齢期の対象の内訳は、通常学級が7名、特別支援学級が8名、通級指導教室利用者は0名、特別支援学校が10名であった。

研究2(質的調査)の対象は、研究1において承諾をいただいた保護者3名および特別支援学校の高等部、すなわち、15歳から18歳までの子どもの教育に携わるX県下の教諭5名、並びに、福祉サービス事業所長1名であった。

表1. 回答者属性(N=69)

	父	母
40歳代	0	21
50歳代	4	31
60歳代以上	0	13

表2. ASD児・者の年齢の男女間の比較

	男性	女性
人数	64	5
平均月齢	263	288
SD	96	108
range	84-488	140-457

df=6, n.s. (welch)

表3. ASD児・者の年齢のID有無による比較

	ID無	ID有
人数	22	47
平均月齢	249	269
SD	109	86
range	96-488	84-480

df=34, n.s. (welch)

倫理的配慮

本稿における研究は、質問紙調査においては書面で、面接調査においては口頭と書面で、研究の主旨および公表についての説明を実施し、同意を得ている。ただし、意思疎通の限界などの理由から、保護者や教諭の了解であり、ASD当事者の同意は得られていない。特に保護者に関し

ては、研究によってASD当事者が得る利益性（支援のあり方の情報共有と支援への社会的理解など）を理解してもらい、保護者による代行意思決定をもって研究を行った。

面接調査では、文書にて情報共有と録音についての承諾を得た。研究結果は、協力者の利益になるように、研究終了後に書面で報告することを伝えた。（図1）

図1. 質問票

「自閉スペクトラム症児の保護者が抱える、性に関する問題」についてのアンケートのお願い

東京福祉大学大学院 社会福祉学研究科 河本 昌也
東京福祉大学大学院 社会福祉学研究科教授 立松 英子
平成29年4月3日

障害のあるお子様の性行動については、悩んでいるご家族は多いのに、対応についての研究は少なく、教育や福祉の現場では、適切なアドバイスが得にくい状況があります。過去の文献を紐解いてみても、研究そのものが乏しく、時代に合った支援システムや方法についての情報は決して多くありません。そこで、お子様の性の問題に真摯に向き合い、現在奮闘されておられるご家族や、過去の経験から適切な助言をお持ちのご家族から、多くのご示唆をいただくことができるのではないかと考えました。

本調査の目的は、自閉スペクトラム症を伴うお子様の性の問題に関して、ご家族のお困りの実態や取り組みの様子を明らかにし、それを分析することにより、福祉や教育の現場における具体的で効果的な方策を見出すことです。調査の結果は修士論文にまとめさせていただき、研究の進展によっては学会発表や論文発表等につなげる可能性があります。それによって、このテーマへの社会的関心が高まり、福祉や教育の現場で適切な支援が行なわれるようになることを最終目標としています。

尚、記入漏れがありますと、せっかく書いていただいた資料を分析にかけることができません。大変恐縮ですが、漏れのないようにご回答ください。公表の際には、いただいた情報はできるだけ数値化し、個人情報が入らないようにいたします。資料は他者の目に触れないように細心の注意を払います。

可能であれば、本調査終了後に、インタビューによりさらに詳しいお話をお聞かせいただきたく思います。ご協力いただける方は、文末の記載欄にお示しいただきますようお願い申し上げます。

以下、選択肢から該当する数字を選んで○を付けてください。重複するものは両方に○をつけ、該当する選択肢がない場合は、その他の欄に自由にご記入下さい。

1. お子様の基礎情報
 - (1) 性別 (1.男 2.女)
 - (2) 年齢 () 歳 () カ月
 - (3) 診断 自閉スペクトラム症に (1. 知的障害は伴わない 2. 知的障害を伴う)
 - (4) 自発的なコミュニケーション手段 (1. 要求表現はない 2.. 指さしや身振り 3. 単語 (+指さしや身振り等) で伝えようとする 4. 二語文以上で表現する)
 - (5) 教育の形態 (1. 通常学級 2. 特別支援学級 3. 通級指導教室 4. 特別支援学校 5. その他 (卒業した等:)
 - (6) お子様が生生活を共にしているご家族の構成 (例: 母・妹・・・) ()
2. 回答者の基礎情報
 - (1) アンケート回答者の性別 (1. 男 2. 女)
 - (2) アンケート回答者の年齢 (1. 20歳代 2. 30歳代 3. 40歳代 4. 50歳代 5. 60歳代以上)
 - (3) お子様との関係 (1. 父か母 2. 祖父か祖母 3. 養育者 4. 施設の支援者 5. その他 ()
3. お子様の性行動に関して
 - (1) お子様の性に関して不安や悩みがありますか (1. ある 2. ない)
 - (2) 「1. ある」と答えられた方におうかがいします。それは以下のどれですか。(複数回答可)
 - (1) 人前で裸になったり自慰行為をしたりなど、して欲しくない行動がある
 - (2) 人前で猥語等の、他者の注目を集める言葉を発してしまう
 - (3) 気になる相手につきまとう、ついていく、覗き見をしてしまう
 - (4) 気になる相手に、時間・場所・タイミングをはからず告白をする
 - (5) 気になる相手に抱きつく、においを嗅ぐなどの不適切な身体的接近をする
 - (6) 嫉妬や思い込みから、本人や他者に対して怒りをぶつけることがある

(7) その他

- (3) 性的表現のある物品や情報に関して心配はありますか(1.ある 2.ない)
 (4) 「1.ある」と答えられた方におうかがいします。それは以下のどれですか。(複数回答可)
 (1) アニメ・書籍等を購入する
 (2) 性的表現のあるメディアにアクセスする
 (3) その他()

4. お子様の性行動に関する不安や悩みへの対応について

- (1) 不安や悩みへの対応においてお困りのことはありますか。(複数回答可)
 (1) お子様の性の相談ができる窓口がわからない
 (2) 窓口に行っても適切なアドバイスが得られない。
 (3) 第二次性徴で起こる体の変化を本人にどう説明していいかわからない
 (4) 男女交際をどこまで認めるべきかわからない
 (5) 羞恥心の欠如や衝動性が抑制できない等の特性から、将来、性問題の被害者・加害者にならないか不安
 (6) 氾濫する性情報を遮断したいが、術がわからない
 (7) その他()
 (2) お子様の性行動に関して、家庭内で相談できる相手はいますか。(1.いる 2.いない)
 1.に○をつけた方のご関係()
 (3) それらを家庭外で相談したことはありますか。(1.ある 2.ない)
 1.あると相談された方はどこに相談しましたか。()
 (4) 家庭外の相談機関で、有効と考えられる事柄や制度にはどんなものがありますか(複数回答可)
 (1) 専門家によるご家族への講習会
 (2) 専門家による各家庭への個別指導
 (3) 学校によるお子様へ向けた性教育の拡充
 (4) 当事者同士の集まりでの情報交換(親の会等への参加等)
 (5) お子様が取れる性情報に関する書籍やDVDやyou-tubeなどの制限
 (6) 専門機関による啓発ビデオの製作と公開
 (7) その他(有効もしくは有効だった方法があれば詳しくお願いします)

5. それらの悩みを解決するのに必要と考えるものはなんですか(複数回答可)

- (1) 人的支援制度の拡充
 (2) 教育制度の拡充
 (3) 相談機関の拡充
 (4) 専門家の養成
 (5) 親同士のネットワークの構築
 (6) 親自身による、基本的生活習慣の育成(清潔や身だしなみなど)
 (7) 社会への啓発活動・情報提供

6. 自閉スペクトラム症を伴う子どもの恋愛の将来像

- (1) お子様の性の目覚めを見越して、性情報は前々から伝えるべきだと考えますか。
 (1. 伝えるべき 2. 自然にまかせるべき 3. 遮断すべき)

自由にご意見をお書き下さい。(部分的にはそうだが○○に関しては・・・など)

- (2) 同性・異性に関わらず、特定の相手に強い愛着をもつ場合、関わりはどうしていくべきだと考えますか。
 (1. 奨励するべき 2. 自然にまかせるべき 3. 遮断すべき)

自由にご意見をお書き下さい。(部分的にはそうだが○○に関しては・・・など)

- (3) 将来、お子様が結婚を望んだときどうしていきべきだと考えますか。
 (1.奨励するべき 2.自然にまかせるべき 3.抑制すべき)

自由にご意見をお書き下さい。(部分的にはそうだが○○を条件として・・・など)

このアンケートの内容に関して、後日、面談させていただいてもよいでしょうか。もしよろしければ、下の□にチェックをご記入の上、連絡先(電話番号やメールアドレスなど)をお知らせ下さい。

☐

お名前()
 連絡先()

以上で、すべての質問は終わりです。お忙しい中をご協力ありがとうございました。

研究手続き

<研究1>

研究1における質問紙調査は、2016年8月に実施した。調査の実施にあたり、事前にX県及びY県の自閉症協会会長と面談し、研究の主旨を伝え、協力の承諾を得た。個人情報保護の観点から、アンケート用紙の封入及び発送作業は、両県の自閉症協会に一任した。アンケート用紙内に、回答は数値化し、個人が特定できる情報に関しては公表しないことを記載した。また、<研究2>の面接調査に協力できる方を募集するためアンケート用紙内に承諾用のチェック欄を設け、協力を承諾した方には連絡先を記載していただくこととした。

質問内容は、「①実態の解明に関する内容」と「②問題の解決方法に関する内容」で構成した。「①実態の解明に関する内容」は、ASD児・者の年齢や障害の程度、家族構成、悩みの有無や内容に関する質問であった。「②問題の解決方法に関する内容」は、試みている(きた)解決策、有効と考えられる(た)手立てや制度等であった。自由記述の項目を設け、問題解決のために何が必要だったのかを具体的に記述していただいた。

<研究2>

研究2における面接調査は、2017年4月から2018年11月にかけて実施した。研究1(質問紙調査)で面接の承諾を得た保護者3名を対象として、半構造化面接を行った。教諭5名に対しては、学校での性の問題への取り組みをテーマに据え、自由な意見をうかがった。その際、自身が実践されていた取り組みだけに限定せず、他の教諭や他校での取り組みも含めて話をうかがった。

結果

<研究1>

アンケート用紙に記入した保護者のうち、子どもの性に関して不安や悩みが「ある」と回答したのは45名、「ない」と回答したのは24名であった。(表4)

「ある」と回答した45名のうち、その具体的な内容についての質問で一番多かった回答は「人前で裸になったり自慰行為をしたりなど、して欲しくない行動がある」の13名であった。続いて「人前で猥語等の、他者の注目を集める言葉を発してしまう」と「気になる相手に抱きつく、においを嗅ぐなどの不適切な身体的接近をする」がそれぞれ6名で、さらに「気になる相手につきまとう、ついていく、覗き見をしてしまう」が5名であった。それらは、表5のように6つにカテゴリー化された。自由回答欄には23名が記し、子ども

の状態によって、保護者の不安や悩みの内容は細分化することを表す結果となった。(表5)

自由回答欄には、表6のようにID無群からは将来的な悩み、ID有群からは現在進行している悩みが主に集まった。(表6)

家庭外での相談機関において有効と考えられる事柄や制度を挙げてもらう問いでは、「専門家によるご家族への講習会」を挙げる意見が最も多く(58%)、次いで、「当事者同士の集まりでの情報交換(親の会への参加等)」「(43%)、」「学校による性教育の拡充」(37%)、「専門家による各家庭への個別指導」(15%)と続いた。(表7)

表4. 悩みの有無

	男性回答者 (父)	女性回答者 (母)
悩みあり	3	42
悩みなし	1	23

表5. ASD児・者の行動で、保護者が抱く悩みの内訳
(複数回答可)

内容	人数
人前で裸になったり自慰行為をする	13
注目を集める発言	6
抱きつく、匂いをかぐ	6
付きまとい、覗き見	5
怒りをぶつける	3
告白をする	2

表6. 自由回答欄の回答例

ID無	ID有
<ul style="list-style-type: none"> ・性犯罪にまきこまれないか不安 ・将来性衝動を自制できるか不安 ・好きな先生に裏切られたかと思いつき、攻撃が始まった ・一生結婚できないかもしれないと悲観的に親は捉えている 	<ul style="list-style-type: none"> ・一日に何度も自慰行為をする ・女性の耳を注視する ・性に関する悩みや思いがあるのか分からない ・気になる相手をじっと見てしまう ・知らない子どもでも近づいてしまう ・うつぶせで陰部をこする行為が頻繁 ・股間が気に入り、ズボンの上から触る ・今は大丈夫でも将来が不安

表7. 家庭外で有効だと考えられる事柄や制度
(複数回答可)

内容	人数
専門家による家族への講習会	40
当事者同士の情報交換(親の会など)	32
学校での性教育の充実	27
専門家による各家庭への個別指導	20
性に関するメディアを制限	13
啓発ビデオ	9

＜研究2＞

具体的な事例を通じ、実践されている取り組みについて尋ねた。以下、研究2の代表的な例として、対象者8名のうち、保護者1名、教諭1名の結果を記載する。

保護者Aさんへのインタビュー調査 (2017年4月17日実施 Y県)

子ども(ASD者)の基本情報	
性別	男性
年齢	30歳8ヶ月
診断	ASDに知的障害を伴う
自発的コミュニケーション	単語(＋指さしや身振り)で伝えようとする
現在生活を共にしている家族構成	父・母
保護者の基本情報	
性別	女性
年齢	50歳代
関係性	母
一番の悩み	性行動に関して、今は(ないので)大丈夫。ただし将来はどうなるのか不安
対象者の主たる対応者か⇒はい	

Aさんの子どもはすでに成人しており、今まさに性の問題に取り組まれている親や、これから直面するであろう親への助言を含め、体験を語ってくださった。性にまつわる取り組みだけではなく、歯科受診時の開口の促しや偏食への対応法、体を洗う際の教え方など、家庭内での工夫は多岐に渡った。「可能性を想像しながら、『どうすればできるようになるだろう』と考えて、それを子に見せ、真似をさせ、試行錯誤することの繰り返しだった」、「できることを増やす経験を子が小さなうちから積み重ねていくことが性の問題に向き合う以前において肝要」とのことであった。

「性に関しての不安や悩み」に関しては、「現在は(ないので)大丈夫」としつつも、「将来的にはどうなるか心配」と回答された。「振り返ると、一番大変だったのは高校生のときなんですよ」と、射精が始まってからの時期を挙げた。「なぜ一番大変だったのか」という質問には、性の対応のための情報の少なさを指摘していた。性の衝動に関しては、「全面禁止ではなくて、(性は)生きるのと同じことなんだから、ルールを作り、子どもがそれを守るように家族で支援することが重要」と捉えていた。具体的には、自慰行為のルールとして、「『家の××の部屋』です」と教えたことで、外出先で制御することができていたという。「どうするのがいい方法かということを選択する、やっていいことをまとめて伝えることが大切」と話してくださった。

「悩みの解決に有効と考える方法」については、「特別支援学校だからこそ、性を教育内容にきちんと位置付けるべきだと思います。教え方の工夫も」、さらに、「体を清潔に保つ、人にやたらと見せてはいけない場所があるなど、小さい頃からきちんと教えていくべき」とした。

高等特別支援学校F教諭へのインタビュー調査 (2017年6月19日実施 X県)

回答者基本情報	
性別	男性
年齢	40歳代
経歴	県内の特別支援学校を歴任し、教育委員会への異動時は障害児への性教育を研究した。現任校でも性教育を指導している。

「性について、どのように教えているか」との問いに、現在の学校ではワークシートを自作し、授業に活用していると回答された。性教育はステップを踏んで進行し、第一に、「実態の把握」を行い、第二に、適切なタイミングで「この子にはここまで教えよう」などの教育内容の見通しを立てて行なうということであった。

「性教育を行う上で一番大切に思っていることは？」という問いに対しては、「命の大切さを知ること」及び、「自他の尊重」「自己肯定感」を育てることであると回答された。これらは、「学校が教えるというよりも、小さい頃から家庭と地域と学校でやっていくもの」と考えられていた。

考察

量的調査(研究1)においては、男女比が64:5(94%:6%)と大きく、年齢幅も広がったため、性別や年齢、保護者の性別などによる比較はできなかった。また、回答も多岐に渡り、個別性の高さが裏付けられる結果となった。「保護者が悩みと捉える子どもの性行動とは」との問いに対して様々な種類の回答が寄せられた(表5)。すなわち本研究の目的「①ASD児の保護者における性の悩みの実態解明」では、梶(1987)が指摘したように、保護者や指導者は性の指導の必要性を理解しながらも多くの悩みを持っていることが示唆された。

また、悩みが「ない」にも関わらず回答を寄せてくださった24名に関しては、他の多くの困っておられる家庭のためという意識と、両県の自閉症協会の働きかけがあったからであると考えられる(表4)。

自由回答欄を設定し、選択肢以外での回答も求めたが、保護者が抱えている悩みの多くは他者に影響が及ぶ行為で

あった(表6)。これはHaracoposとPedersen(1992)が指摘している内容と一貫する。つまり、ASD児の性に関する問題は、他者と自分がどんな関係で、自分の行動で他者がどう思うかなどにまで思いが至らないという、ASDの障害特性と直結している。本研究の目的「②教育・福祉における支援の方向性を見出す」では、「ASD児の多くは他者との関係を(具体的に)『学ぶ/習得する』必要があり、保護者や指導者には、関係に関する知識や振る舞いの習慣を『支援する』必要がある」(川上, 2015)ことが示唆された。

加えて、この回答においてID無群とID有群で比較したとき、前者からは将来的な悩み、後者からは現在の悩みが主に集まった。両群は悩みの内容において一致しない可能性があること、ならびに後者への相談支援は緊急性が内包される可能性があることが示唆された。

「保護者が性問題に有効だと思う家庭外の事柄や制度」については、「専門家による家族への講習会」、「当事者同士の集まりでの情報交換(親の会への参加等)」、「学校による性教育の拡充」など、子どもが性の知識を得ることよりも、保護者自身が子どもの性に対する有効で正しい情報を得たいと望んでいることが示唆された(表7)。

質的調査(研究2)においては、保護者も教諭も、性の問題に向き合う以前に、「成功体験や生きていくための基本的なルールの定着を小さなうちから積み重ねていく」ことの重要性を強調していた。F教諭への面接では、「ルール」という言葉がキーワードであった。「子どもの実態を把握し、どこまで教えたらいいか見究めをし、『ルールは守ろう』と説いて、ルールを確認したり、新たに作ったりしていきながら、性の授業を展開していく」としていた。神尾(2010)が指摘した、「長い発達過程の中でASD症状はさまざまな精神活動や行動と影響しあって、また周囲の人々とも影響しあって、複雑な症状や行動パターンを形成していく」ことと重なり、発達期全体を通して取り組んでいく課題と考えられた。

F教諭が強調していた「見究め」は、「タイミングの判断」ともいえる。蓮香(2016)も、「子どもにとって指導の時期が早すぎればイメージがもてず理解できないままに終わったり、あるいは、かえって不安をおおることになったりする。その一方で、遅すぎると、自分の身体の変化に違和感や不安をもち続ける」ことになるとして「見究め」の重要性を述べている。また、自身もASDである学者のグニラ・ガーランド(2007)も、「ASDへの指導は常に対象者の年齢と理解力に合わせたものである必要がある」としている。

面接調査に応じてくれた保護者も教諭も、その取り組みは真剣そのものであり、子どもを中心に置き、関係各所(医療機関、学校、家庭、地域、行政など)が一丸となった

チームプレイで対応してきたことがうかがい知れるものであった。このことから、問題解決には家族だけで抱え込むことなく、専門職を交えたチームプレイで取り組むことも大切な点であることが示唆された。

ASD児・者の性の問題の要因は多様であり、手立ては一つではない。さらに、うまくいった策が誰にでも効果があるとは限らない。しかし、生きるために必要な基本的なルールの定着を土台に、小さな頃から継続して取り組んでいくべき課題であることが示唆された。加えて、家庭と学校などの社会的資源とが連携した粘り強い支援の継続が必要なことが示唆された。

結論

Newton(2006)は、「性に関心を抱くのは正常なことで、その表現は様々だ。そしてその人が障害を持っていても変わらない」と述べている。性は誰にでもある、人間として最も根源的で当たり前の生理である。性は「問題」ではなく、「誰にでもある」という観点から捉え、禁止や抑制ではない、生涯を見通した視点から取り組んでいく課題である。ASDならではの個別性の高さを熟知して、さまざまな専門家をチームに巻き込み、地域社会全体で支援をすることが重要と考える。

最後に、先述のグニラ・ガーランド(2007)は「いわゆる『行動障害』が深刻な形で現れたとき、一般的にその人の生活の中身は非常に貧弱であることが多い」と記している。すなわちASD児の生活の質を上げるための支援が、間接的に性に対する支援の一つになりえることが示唆されている。

謝辞

本研究は、X・Y両県の自閉症協会の会員の皆様とご家族様のご協力によって成り立った。また、同協会会長をはじめとする理事の皆様からは、研究に対する多大なお力添えとご配慮を受けた。謹んで感謝を申し上げます。

面接調査では、特別支援学校教諭各位、福祉サービス事業所長のK様においても、お忙しい時間を割いて、支援現場での工夫や取り組みに関する質問に快く応じていただいた。ここに厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- American Psychiatric Association (2013): Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Fifth Edition.
高橋三郎・大野裕監訳(2014): DSM-5精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院, 東京.

- グニラ・ガーランド(2007): 自閉症者が語る人間関係と性. 東京書籍, pp158-177.
- Haracopos, D & Pedersen, L. (1992): *Sexuality and Autism Danish Report*. Autism Independent UK. <http://www.autismuk.com/autism/sexuality-and-autism/sexuality-and-autism-danish-report/> (最終アクセス日 2017年11月9日)
- 蓮香美園 (2016): 青年期を支える保護者・教員への支援—対人関係と性の支援のために—. 特別支援教育研究 **711**, 17.
- 服部祥子・渡部純子・岡田 督・岡本正子・前田志寿代(1989): 障害児と性. 日本文化科学社, pp1-33.
- 梶利明 (1987): 自閉児の性の発達と行動に関する調査研究. 情緒障害教育研究紀要 **6**, 47-52.
- 神尾陽子 (2010): ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者に対する支援のための手引き. 国立精神・神経センター精神保健研究所, pp1-13.
- 川上ちひろ (2015): 自閉スペクトラム症のある子への性と関係性の教育. 金子書房, 3.
- 国分聡子 (2016): 青年期における異性との関係のもち方についての支援. 特別支援教育研究 **711**, 22.
- 近藤明子・高杉紀久子・伊藤健次・知花正剛・井口裕子・小林 明・池 弘子・小林重雄・長森則夫・杉山登志郎・岩田泰秀 (2015): 臨床家のためのDSM-5虎の巻. 日本評論社, 東京, pp38-39.
- 森則夫・杉山登志郎・岩田泰秀 (2015): 臨床家のためのDSM-5虎の巻. 日本評論社, 東京, pp38-39.
- Rutter, M, (2011): Progress in Understanding Autism 2007-2010. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **41**,395-404.
- Newton, G. (2006): Social/Sexual awareness, Autism Research Institute. https://www.autism.com/understanding_social_sexual (最終アクセス日 2017年11月10日)
- 大井清吉・山本良典 (1989): ちえおくれの子の性指導. 福村出版, 東京, pp11-22.
- 田実潔 (1999): 思春期を迎えた自閉症児の特徴に関する研究—養護学校小学部と中学部の自閉症児の比較検討を通して—. 特殊教育学研究 **37**(1), 41-48.
- Wing, L & Attwood, A. (1987) : Syndromes of Autism and Atypical Development. In: D. J. Cohen, and A. M. Donnellan (Eds.), *Handbook of autism and pervasive developmental disorders*, Wiley, New York, 3-19.

Sexual Issues of Individuals with Autism Spectrum Disorder — Considering the support of caregivers' concerns —

Masaya KAWAMOTO and Eiko TATEMATSU

School of Education, Tokyo University of Social Welfare (Isesaki Campus),
2020-1 San O-cho, Isesaki City, Gunma 372-0831 Japan

Abstract : The sexual issues of individuals with autism spectrum disorder (ASD) present serious concerns for their caregivers because they comprise an impairment of social interaction that is affected by individual ASD characteristics. The present study explored the situation surrounding caregivers' concerns about the sexual issues of individuals with ASD to identify appropriate support services in the field of education as well as social welfare. First, a survey questionnaire was conducted with 69 caregivers from the Autism Association about their children with ASD (64 males and 5 females; age range, 7–40.8 years; mean age, 22 years and 1 month). Second, the authors interviewed five teachers working in special support schools and three caregivers. The results showed that (1) statistical differences could not be determined regarding gender and age because the gender ratio was mainly male (94%) and participants had a wide age range. The concerns of caregivers were prolonged if the child had an intellectual disability. (2) Caregivers and teachers expected consulting and training opportunities to be provided and expanded and felt the school education of their children was important. Caregivers considered the children's sexual issues to be highly individualized and confidential. These results suggested that sexual issues should be considered within the context of an individual's "quality of life," with the support of social services such as school social workers.

(Reprint request should be sent to Masaya Kawamoto)

Key words : Sex, Autism spectrum disorder, Autistic traits, Caregivers, Social resources

